



有松まちづくりの会役員会（9月26日）

令和4年度以降の日本遺産事業について、継続的に実施していくものについて具体案を求めました。

11月26日(土)に開催する全国町並み保存連盟東海ブロックゼミ有松大会についての詳細の提案が担当の企画部よりあり、皆で協議しました。午前中は有松あないびとの会による町並み案内を実施し、午後は絞会館2階で根尾文彦氏による講演と東海各地の参加者からの報告・パネルディスカッションを行うことになりました。

有松日本遺産運営協議会・実行委員会(9月23日)

「多くの人が集まってくるまちにしたい」との竹田会長の挨拶の後、歴まち室より令和3年度「日本遺産を通じた地域活性化計画進捗状況報告書」と令和4年度以降の日本遺産事業についての説明がありました。



国道1号交差点標識「有松」に変わる（8月1日）

すでにご存じの方も多いと思いますが、国道1号「桶狭間」交差点の地点名標識が「有松」に変更されました。かねて地域の方から、呼称実態に合わせてほしいとの要望が出されていました。またこの変更と同時に国道23号の「有松インター」標識が「桶狭間（有松インター）」に変更されています。なお、この地域では市バスのバス停「幕山」の表示が、4月1日より「桶狭間古戦場公園」に変更されています。



桶狭間古戦場観光案内所 建て替え（8月中旬）

観光案内所が建て替えのため、すぐ隣りに設置された仮設のプレハブで案内活動が行われています。手狭のため活動に制約はありますが、年明け2月ごろの建物完成を目指し更なる熱意で案内がされていました。

近年、桶狭間古戦場公園のトイレが増築されるなど施設面での充実が図られています。



芸術の漂うまち 有松

国際芸術祭を盛り上げようと地元の方の作品展示会が開かれています。感染状況が減少に向かう9月17日、訪ねました。芸術祭目当ての方が多く訪れていました。

①有松庵

退職後有松に移住された川口廣次さんをご自宅の一角に開いた展示スペース。デザイン部に所属した現職当時から制作した立体の木工作品や移住後描いた有松町並みのスケッチ画が展示されていました。「芸術祭に触発され、これまでの作品を見ていただきたい」と。

町並みスケッチは今後かわら版誌上で紹介します。

②早川嘉英個展 STILL ALIVE in ARIMATSU

嵐絞りを復元したことで知られる早川嘉英氏は「現代に生きる人たちに共感を得なければならない」と、新しい表現を絶えず生み続けています。嵐絞りの着物と共に幾何学模様を組み込み現代風にアレンジした額装作品が展示されていました。いまなお絞りの産地であることをKONMASAビル2階から発信しています。

③CATS nekoz nyannyan 3

”ありまつ舎通ぐ”の展示スペースにネコがあふれていました。デザイナーの武村彩加さんの作品。「仕事では平面作品が多いので立体作品を紹介したかった」と。展示室中央に暖簾のようなネコ柄を印刷した布が掲げられており、小さな子供でも作品を楽しめるよう工夫がされていました。発想が新鮮に感じました。

④TRY ART「私たちにとってのSTILL ALIVE」

KONMASAビル1階に東陵中学校芸術文化探求部の生徒さんの作品が展示されていました。迷路です。



③ ↑

④ →

国際芸術祭あいち2022 展示作品紹介 その2

● 伝統家屋の軒先等8か所：ミット・ジャイイン

カラフルなりボン状の絵画(ピープルズ・ウォール(人々の壁)2022)が東海道沿いを彩っています。伝統的な絵画の可能性を更に広げるべく、キャンバスの両面に描く・切るなどを実践してきました。浮世絵に描かれた有松の風景、絞り染めの反物が屋外で風にたなびく様子や店先の暖簾に着想を得ました。

ピープルズ・ウォールは権威主義や君主制への抗い、市井の人々の力を象徴する旗です。暖簾のように公共空間とプライベートな空間を穏やかに仕切っていますが、このリボン状の絵画には分断や境界をあいまいにし、その絵画に触れる私たちに生き延びるためのポジティブなエネルギーを届けようとする作家の願いが込められています。



校会館駐車場での作品

もうすぐ 秋季大祭:10月2日 始まる

待ちに待った有松の山車まつり、コロナ禍で2年間開催できなかった「悔しさ」を取り戻すかのように、まちには熱気があふれています。2019年より東町布袋車大幕の復元新調が進められ、正面幕が完成しています。そのお披露目が祭り当日行われます。ぜひご覧ください。

有松山車会館 10月2日(日)10:00~16:00

今月と来月、かわら版誌上で有松の3輛の山車の紹介をします。



布袋車正面幕

深掘り 有松の山車 神功皇后車

「神功皇后車」は、明治6年(1873)に西町の注文により名古屋の御車大工 久七 によって制作されました。このため金具や衣装に天満社の神紋である梅鉢紋を多数見ることができます。

2層構造・唐破風の屋根と四本柱・前棚・からくり人形・外輪で輪掛けのある車輪等、名古屋型の特徴を備えています。装飾が少なく、全体を黒漆喰、金箔、金具で飾っています。唐破風に波濤の彫刻、2階正面の内側には波の彫刻があります。

現在の大幕は平成6年(1994)に新調した無地の猩々緋で、正面には祭礼町名である「金龍町」が金糸で刺繍してあります。一枚続きの水引幕は白羅紗に牡丹・杜若・水仙・芙蓉などの花が刺繍され、後面には黒糸で「小華筆」と書かれてあることから、渡辺小華（渡辺華山の次男）の筆であることが分かります。下絵が巻物に仕立てられ、薄く彩色されて文嶺講に保管されています。

からくり人形は、神功皇后が朝鮮半島に出陣する際に鮎釣りを行って神意を占ったという日本書紀の故事に由来しています。演技が始まると、神功皇后は立ち上がり、武内宿禰と一舞した後、鮎を釣ります。前棚の前人形は御幣を持った神官です。山車の曳き出しの時に、御幣を左右に振り、目と口を開けたり閉じたり、舌も出します。また、祭礼の朝、山車行列の先頭を曳行しながら東海道を清める「露払い」の役割もあります。作者はいずれも名古屋のからくり人形師 土井新七が手掛けたとされています。

《当初からくり人形には別の人形が載っていたのですね》

建造当初は、大将人形の関羽と2体の唐子人形が載っていました。明治27・28年(1894,1895)の日清戦争の大勝を祝して、現在のからくり人形に載せ替えられました。唐子人形の1体の頭内から墨書銘が出てきて、名古屋のからくり人形師 住田真住が制作したことが分かっています。



水引幕



大将人形 関羽

深掘り 有松の山車 唐子車

中町の山車は、3体のからくり人形が全て唐子であることから、「唐子車」と呼ばれています。内海で廻船業を営む豪商 前野小平治とその一族が山車の制作に関わっていました。幕箱や前人形に弘化4年(1847)の墨書銘があり、そのころまでに制作されたと思われます。また、20年の歳月を掛けて作られたとも伝えられています。東端村(現在の南知多町内海)の高宮神社の祭礼に出された祭車でしたが、明治8年(1875)に中町に譲渡されました。

山車の材質は全て鉄刀木(たがやさん)で作られています(唐木で重くて硬い)。外輪の輪掛けには青貝を散りばめた螺鈿細工が施されています。名古屋型の特徴を備えています。知多型の特徴も見られます。山車の後方にある2本の毛槍や四本柱の後方にある見送り幕がそれです。

大幕は無地の猩々緋、水引幕は白羅紗に金糸で波間を鯉が跳ねている図です。これらを美しく飾るために赤珊瑚の房も見られます。房を留める金具も凝っており、鯉状の金具には「松」「竹」「梅」の模様が彫られています。見送り幕には、紺地に金糸で短歌が記されており、冷泉家の書であることが伝えられています。

「あきらけき 御代のしるしハ 玉串の
葉におく露の ひかりにも見よ 尚雄」

からくり人形は文字書き唐子で、その前に左右に動く唐子、麾振り人形の唐子の3体が載っています。文字書き人形は布袋車と操作方法がやや異なります。下から操る人形方は人形と同じ方向を向いて操作します。また、どんな字でも書けるとのことです。前人形は鳥毛のついた笠を被る珍しい佇まいで、名古屋の木偶師2代目住(隅)田仁兵衛真守が手がけました。

《山車を作ったのは誰？動機は？》

5代目前野小平治に長子(後の6代目)が誕生したのが文政8年(1825)です。当時前野家は千石船11艘を持つなど家運隆盛を極めていました。それまでの後継者3代4代が養子だったことを考えると、久し振りの直系の後継者の出生に豪華な山車の制作を思いついたのではないのでしょうか。

《なぜ制作に20年もかかったのか？》

天保4年(1833)天保の飢饉。江戸でも毎日餓死者が出、幕府は窮状を救うために救済米を確保するため5代目前野小平治に米の江戸への回送を依頼しました。持ち船11艘や多くの傭船により4万3千石の米を買い付けました。陣頭指揮にあっていた5代目に山車を顧みる余裕はなかったのではないのでしょうか。

《埋蔵金伝説とは？》

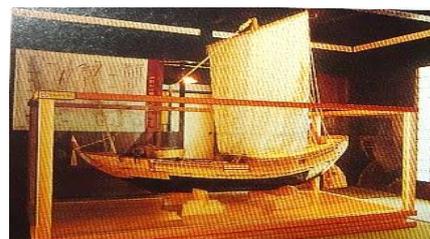
5代目の商売を離れた協力は、尾張藩からにらまれる原因ともなりました。藩を疎かにした不届者と・言いがかりをつけられ、お家断絶の危機に直面しました。5代目は密かに小判数千枚を埋蔵したとされています。これが「埋蔵金伝説」です。



螺鈿細工 見送り幕



水引幕



当時の千石船(弁財船)

絞・瓦灯りストリート開催（9月3日～10月2日）

開催初日、19時頃現地を訪れました。昨年同様、灯りのオブジェが有松の夜を彩っていました。服部邸から竹田邸の旧東海道沿いに置かれ、昨年より設置個数も輝きも増していました。地元の家族連れでしょうか、友人連れでしょうか、数人のいくつかのグループが途切れることなく街道を行き来していました。

今年は有松駅改札口前に大きなシンボルオブジェが置かれていました。今年制作テーマは”波と雲”。「古くから有松の町並みに欠かせない、普段は屋根の上でしか見られない瓦を波と雲に見立てて制作しました」との事。今年も、瓦制作は伊達由尋氏、絞制作は久野剛資氏。

灯りストリート開催に合わせ上記2氏を講師に”創作体験会”が企画されています。有松あなびとの会による”有松のまちあるき”や「庄九郎」での”創作料理”も企画されています。

※申し込みが続いています。



シンボルオブジェ(有松駅)



灯りストリート(絞会館前)

Eテレで絞り染め紹介（9月6日）

この夏8月から9月にかけ放映されたEテレ「趣味どきっ！」”浮世絵で体感！リアルな江戸LIFE”の6回目”夏のおしゃれ生地と模様を遊ぶ”をご覧になった方もいることでしょう。その番組の中で、現在でも絞り染めの技術が継承されている当地が取材されていました。紙面で簡単に紹介させていただきます。

竹田嘉兵衛商店では伝統工芸士の荒川泰代さんがやたら三浦絞り①を、張正さんでは鶉飼敬一さんが豆絞り②の作り方を紹介されていました。番組では主に浮世絵に描かれた浴衣の絞り柄が話題にされ、テキストには竹田嘉兵衛商店所蔵の浮世絵(右2枚)も掲載されていました。

番組で、江戸っ子に藍染めが受け入れられた理由を、中村倅子さんが「藍のもつ粹」と表現され「染めたての藍を着ると、襟元がうっすらと色付く。これこそが粹。江戸っ子の気っ風にあった」とのお話しが印象に残りました。

補① 下絵がなく絞り手の勘が頼り。名人の北野とよさんから受け継ぐ。写真右の叶江さんは、縫い絞りの伝統工芸士。

緊張② 技法は一度途切れ「昭和30年代に祖父の正一郎と父の良彦・叔父の正己で完成した」と妻の小百合さんの言葉。



↑ 荒川泰代さんと叶江さん



やたら三浦絞り



中村倅子さん



鶉飼敬一さん

近代のアリマツ③「有松に郵便局がやってきた」

有松では当初、山形屋さんで郵便の受取りがされていました。

明治29年(1896)舩屋さんで「有松郵便受取所」が開設されました。お店の東側部分ですが、庇の奥行きが深いことを活かして旧東海道に面して窓口があり、局舎に入らずに郵便物の受取りができました。その後「有松郵便局」と改称され、明治39年から電信業務、43年からは電話交換業務が鳴海局・大高局に先んじて開始されました。いずれの業務も創設にあたり、その費用は絞り商の寄付によっていました。カチャカチャと機械音を響かせ、若い女性交換手が活躍する華やかな職場であったようです。

昭和5年(1930)現在地に移転し、大正時代のロマンを彷彿させる新局舎が建てられ、以後平成10年(1998)まで約70年間薄緑の外壁の建物は多くの方に親しまれました。移転後の昭和6年には集配局ともなり、郵便屋さんも駐在する賑やかな24時間フル稼働の場所でした。昭和20年に集配業務、23年に電信業務が、更に38年に電話交換業務が他局に移管されました。

現局舎は町並みの景観に合わせた町屋風の建物に平成10年新築されました。ポストも景観に合わせ平成11年に碧南市から丸型を移設しました。



現在の有松郵便局

旧東海道沿いには岡家住宅の東にもう1基丸型ポストがあります。昭和59年(1984)容量が大きい角型ポストに一旦変更されたのですが、地元学区や有松まちづくりの会などから「町並みに相応しいポストを」との要望で、昭和62年丸形に戻されました。

催事・行事の予定

10月2日(日) 9:00 有松天満社秋季大祭(夜祭は無し)
有松天満社文嶺講

10月11日～12月11日 秋の名鉄有松キャンペーン

10月17日(月) 18:00 有松町並み相談会 コミセン

10月22日(土) 10:00 みどりシティフェスティバル2022 大高緑地公園

10月23日(日) 7:30 かえで道清掃

10月24日(月) 18:00 有松まちづくりの会役員会 コミセン

発行者 竹田嘉兵衛(有松まちづくりの会 会長)

編集者 加藤 明美(有松まちづくりの会 広報部長)

pegasusb@mc.ccnw.ne.jp

有松まちづくりの会は、ホームページを公開しています。

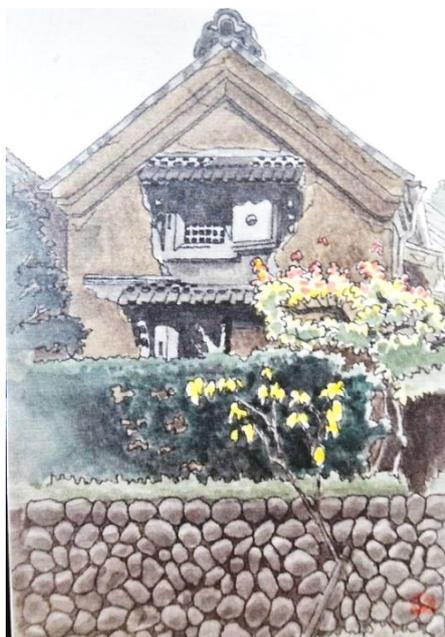


現在の㊦舩屋



洋館時代の有松郵便局

川口廣次の有松街並情景画①



寿限無茶屋の大蔵

